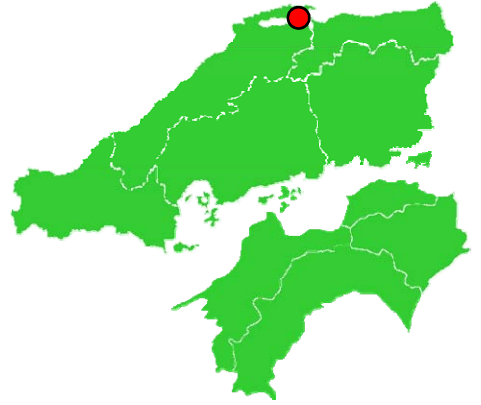
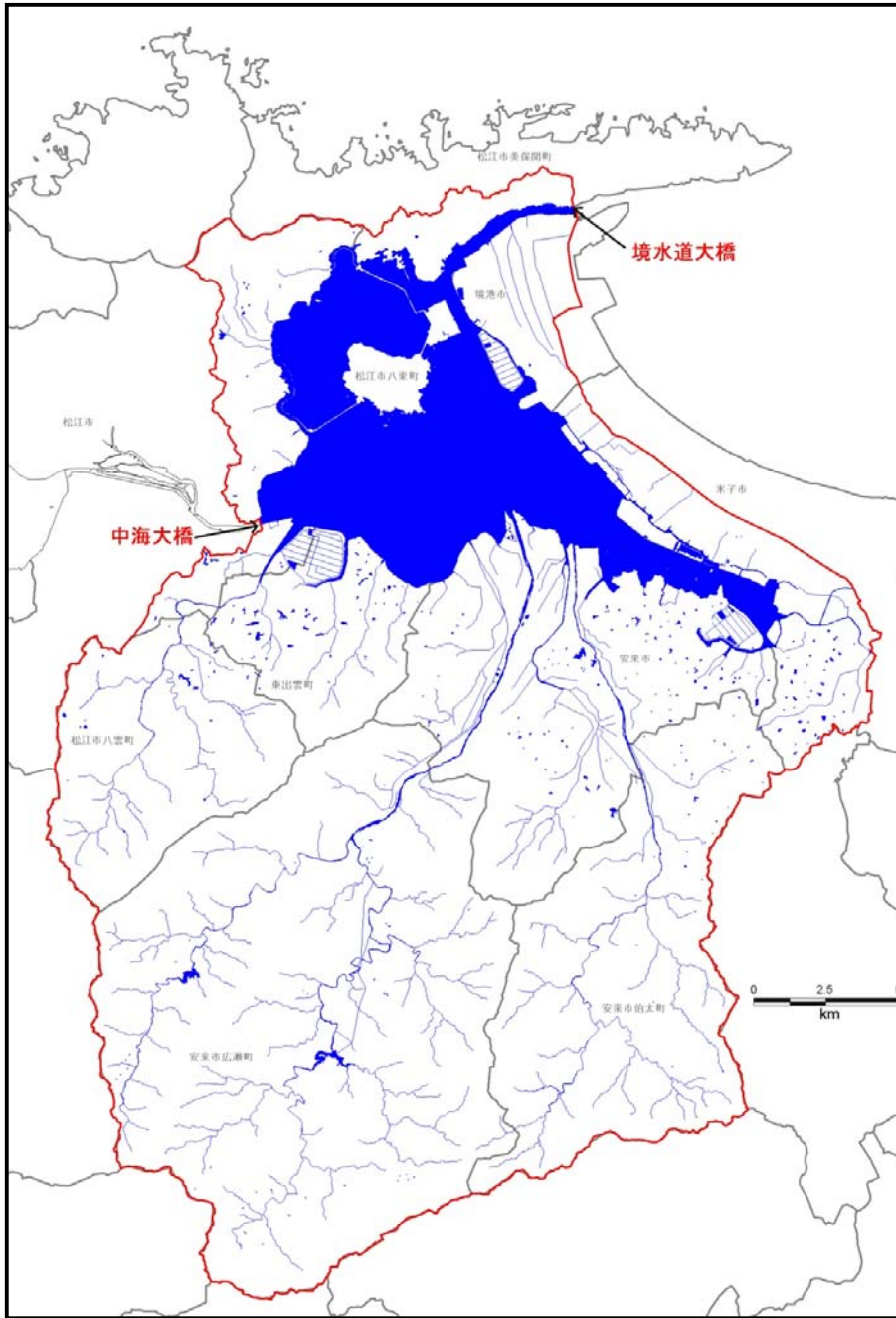


なかうみ
中海自然再生協議会



かつての浅瀬では肥料用の水草採取が盛んだった

自然再生の対象となる区域（全体構想より）



現在の地形



干拓工事前（昭和22年）の地形

伊豆沼・内沼自然再生協議会の取組

1 再生内容

湖沼環境の保全・再生

ラムサール条約湿地である伊豆沼・内沼（登米市・栗原市）は、国際的にも重要な渡り鳥の飛来地であり、地域の人々の生活と密接に関わりながら保全されてきた。

しかし近年、水鳥の飛来種が単純化してきていることや、オオクチバス（ブラックバス）など外来魚による被害が増加していること、水生植物群落に変化が生じていること及び依然として水質改善が図られないことなどが問題となっている。

このため、豊かな水生植物群落の復元と、多様な水鳥・在来魚等が生息していた頃の湿地環境の再生に取り組む。

2 自然再生協議会

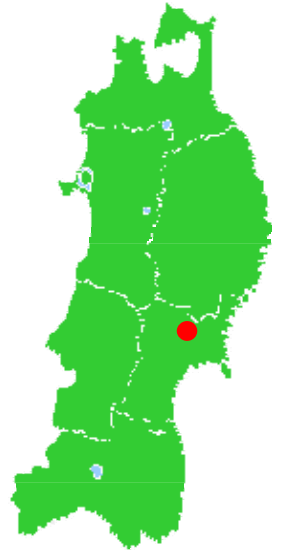
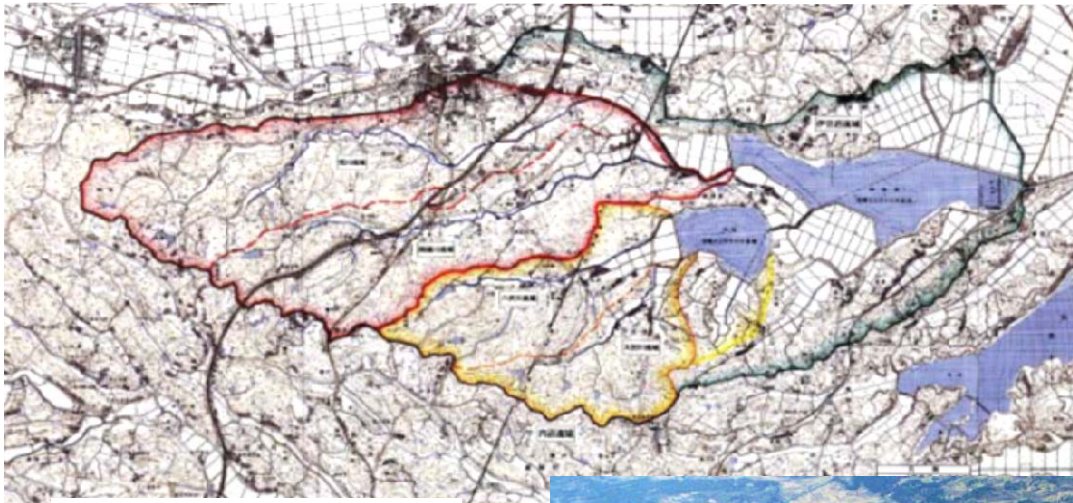
平成20年9月に組織化し、現在の構成員数39。

個人(専門家を含む)12、団体17、関係地方公共団体7、関係行政機関3

3 自然再生全体構想

検討中。

いずぬま・うちぬま
伊豆沼・内沼自然再生協議会



自然再生の対象となる区域
(全体構想案より)

伊豆沼・内沼の全景



落雁の風景



水生植物の植生管理

冬季に枯れた植物体を回収し、減少している抽水、沈水植物等の拡大を助長



抽水・沈水植物の育成・移植

底泥をシードバンクとして活用し、回復が遅れているマコモ等の抽水植物、マツモ等の沈水植物、ヒルムシロ等の浮葉植物を育成



在来魚類・貝類の増殖・放流

オオクチバス等の食害により減少したゼニタナゴ等の在来淡水魚、イシガイ等の貝類を増殖し、沼に放流